

71にっぽんの夏 新島

東京から南へ約150キロ、その洋上に「新島」は浮ぶ。江戸の昔、伊豆諸島の多くがそうであったように、こも流人の島であった。その頃からこの島は日本の影の部分を担当してきた。

抗火石造の低い家並が丘陵をはう。抗火石は、この島の数少ない産業のひとつだ。火に強い特徴をもつこの石はあまり肥沃とはいえない土壌とともに火山が生出したものだ。それはこの島が火山島であることを物語る。しかし、抗火石の移出によって得る収入は1億3千万円にすぎない。海にかこまれたこの地の漁業は、港がないため大型船をもてず、わずかに沿岸にたよる「おおかけあみ」が行われているだけだ。20の小船の水上げは、年間2億5千万円でしかない。名物の「くさや」は本土から原料の鱈をとりよせ細々と作られている。たよるべき産業のないこの島は、今観光開発に島の未来をかけようとしている。おりしも日本中がレジャー・ブームにわく。汚れた海を逃れて誰もが島へ島へと群れ来る。島ブームはこの島も例外ではない。抗火石造の家並はスナックや民宿の看板でうずまり、裸の若者たちが、わがもの顔で島中を闊歩する。民宿で室を追いやられた子供や老人はどこへ身をおくのか。観光収入5億円、島はうるおうたが。

この夏、日本中を医療改善の荒しが吹きまわった。一人の医師が保険医を辞退することによって医療はどうなるか。新島の患者には医師の選択は許されない。なぜなら、島民の健康はただ一人の医師が握っているのだから、一日24時間一年365日、休むことなく家城先生は診察を続けている。しかしこの夏、先生は急激に増えた観光客の患者に悩まされた。

十年前ミサイル基地設置をめぐる島は二分され、血で血を洗う抗争が続いた。当時の面影をつたえる反対派のビケ小屋は朽ちて、今にも倒れそうだ。反対派の頭目であった島の古老、前田宇之助さんは、「戦いはまだ終わっていない」という。

ミサイル基地の海辺に白波が打ち寄せる。若者たちは思い思いの夏を過す。この夏の思い出を白波が消し去る。群をなして島におしかけた若者たちは、夏の終りの今、渡鳥が去るように群をなして帰る。

夏は終わった。小さな島、日本列島、その日本の小さな縮図を描いて、「新島」はある。